

---

# まぶしい人は嫌いです

ちゅんた

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まぶしい人は嫌いです

### 【EZコード】

25714Y

### 【作者名】

ちゅんた

### 【あらすじ】

なんともまぶしいイケメン野郎に懐かれてしまった、地味ライフ  
絶賛満喫中の安藤奈津。

「ナツ先輩！」  
「話しかけるな！」

地味ライフを取り戻したい、突つ込み気質な彼女の日常生活のお話。

## 「最近の不満（前書き）

初投稿です。

軽い気持ちで読んで頂けるとうれしいです。

## 最近の不満

自分で言うのもなんだけれど、私は地味女である。

肩より短い黒髪をちょこんと両サイドにみつあみにして、制服のスカート丈はいたって普通。

いや、膝上5センチくらいなので長めなほうだ。

特に親しい友人もなく、基本的にいつも一人行動をしている。かといって、特にいじめられているわけではない。私のクラスは実際にのんきな人たちばかりで、普通に話をするし挨拶だってかわす仲だ。ただ特別に仲がいい人がいないだけ。

ちなみに私はそんな生活を、ヒーヒーヒーっても満喫している。

私は目立つこと・面倒くさいことがなにより嫌いだ。地味で友達がない今的生活はとつてもラクですごく最高。

そんな私の生活は単調である。部活も委員会も所属していない私は、学校が終われば徒步10分の場所にある家へとまつすぐ直帰する。そして家の隣にある「セボンヌ安藤」という名の喫茶店への扉をあける。

「おじいさんただいま」

「奈津おかえり」

「ヒーヒー豆を挽いている香りをかぎながら、私は制服のジャケットを裏部屋へ放り投げエプロンを身につけた。

毎日、私のおじいさんが経営している喫茶店を手伝っているのだ。（ちゃんと給料はもらいつ）。

「今日、一人もお客様いないね」

「そもそも混みだすんじゃないかな」

おいおい、おじいさん。

意味深な発言じゃないですか。

そう思つた矢先のことだ。

喫茶店の扉がバーンと勢いよく開け放たれた。

「ナツ先輩！ひどいじゃないですか！！なんでいつもいつも先に帰っちゃうんですか！今日俺バイトだつて知つてるでしょ！？」

出たな。私の平穏を乱す不埒な輩め。

こいつは槇原工まきはらたくみ。私の学校の1学年下の後輩だ。

「知らないけど。あんたのシフトなんて」

「店長！ナツ先輩の部屋にシフト置いといてって言つたじゃないですか！」

「ごめん、コピー機の使い方わからなくて」

おい、おじいさんを使うんじゃない。

「もう一つ…じゃあ今から言つから覚えてください。今月は月・火・木・土なんで、月・火・木は一緒に帰りましょうね」

「いらない、その情報」あんたの後ろにいるお嬢さんがたが思いつきリメモとつてますよ。ていうか、今日もどんだけ連れてきてんだ。おじいさんは大喜びだけど（売上の）私としてはうんざりだ。だって、槇原目当てのお客さんって若い女の子ばかりで、黄色い声がそこらじゅうにあふれるんだもん。うるさくてしようがない。

栗色のさらさらな髪に、すらりとした細身の体。ぱちつとした大きな瞳にシャープな小顔。そんでもって人懐っこい爽やかな性格。100人中100人が認める、嫌みのないイケメン野郎だ。槇原がバイトの日には若いお嬢さん方で埋め尽くされることになる。

はーあ、私はこんなまぶしい生き物とは関わりたくないんですよ。人田も気にせず堂々と話しかけられると田立つてしょうがないんですよ。

しかも、よりによつてこいつ人懐っこさ120%なんだよな。こんな地味女放つといてほしいんだけど。。。

「ナツ先輩、ぼーっとしないで仕事してください」

いつのまにやら仕事モードへ突入していた檍原に叱られた。ちくしょつ。

ついでに、おしゃれ度0%の真っ白エプロンを着こなすその感じにすら「ちくしょつ」と言いたい。

「あんたが全部注文とりな」

「ひどい」

「うつせー」

お嬢さん方の注文を私がとつたら、恨まれるつての。決して叱られた腹いせではないのであしからず。

「おじいさん、やつぱりあいつクビにじよつよ」「マキ君、いい子じゃないか」

はあ・・・。この様子じゃ奴とは当分縁切れそうにもない。なんとか今までの地味生活を死守しなければ。はーあ、めんべくせー・・・。

## ねらやかれる学校生活（前書き）

クラスメイトには敬語な主人公。

## おひやかわれる学校生活

地味ライフにおいて大事なこと。

遅刻などといふ田立つ行為は行わないのが鉄板である。なので遅刻するかもなどといふスリルとは無縁でいらっしゃるよう、いつも余裕をもって登校するようにしている。

「安藤さん、おはよ」

いつものように少し早めに登校した私を、前の席の高橋さんが待ち構えていた。

いつも挨拶をかわす仲だけれども、今日は体を後ろに向けている。つまり私と話す気まんまん体勢をとっている。せりは、その表情がなぜかにやつしている。

「高橋さん、おはよー・・・・どうがしました?」

私が席に座るやいなや、高橋さんは身をのりだしてきた。

「安藤さんって榎原くんと仲いいの?」「イイ工まつたくですが

なんだつてー?」

内心、田ん玉が飛び出るほどどの衝撃を感じたが、私はかろうじて表情を崩さずにいることに成功した。自分ナイス。

「えへ、じゃあなんでだろ?」

「・・・何の話ですか?」

「昨日安藤さんが帰った後に榎原くんが来てさあ、「安藤奈津さんいますか?」って聞かれたんだよねえ。だから仲いいんだって思

つたんだけど・・・

「人違いではナイデショウ力。私はそんな人知りません。まったく知りませんが」

「でもフルネームで呼んでたけど。それに何回か来てるみたいだし。クラスの子も何人か話しかけられたって騒いでたもん」あいつ・・・  
そんなことしてやがったのか！

学校でそんなことしたら私まで立つちまうだろ？があ！

「おまえ檍原と仲いいの？俺に紹介してくれんね！？」

急に話に割り込まれたので、声の主を見ると隣の席の山中君が登校なさったようだ。

「山中おはよ～」

「おいーす。つか高橋足とじろよ。パンツ見えてんぞ  
「朝から盛るのやめてくんない？」

高橋さんに何か言いたそうな表情をしつつも、はあっとため息をついて話を終わらせました。そう、山中くんはやられキャラなのだ。  
そんな彼は今のはなかつたかのよつに再び私へと向き直ると、不思議そうに眉をしかめた。

「・・・なぜ、俺をそんな目で見る」「山中君がBしだとこう」とを、さらっと告白したことに驚いています

「はあ！？ちつぱーよ、なんでだよーつか、そんなこと告白した覚えねーよー」

「さつき檍原くん紹介してくれつて言つたから、好きだと思つたんじやない？」

高橋さんのアシストにうなづきながら、私はあわてふためく山中君

を生ぬるご用で見つめます。

「ばっか、お前！そりこつ意味じやねーよー。サッカー部に勧誘するためだよー。」

なんだ。そうでしたか。

ち、つまらん。

「すみませんが私と檍原工とやらは、全くの無関係の赤の他人なので紹介することはできません。ちなみに彼が探しているのは、どこのクラスの同性同名の女子ではないかと思います。クラスを間違えるなんてバカな奴ですね、まったく」

私はこれでシラをきりとおします。

そして学校では奴の視界に入らないよう、より一層注意深く行動しようと心に決めた。

なんとこゝにとでしよう。

今朝気を引き締めたばかりだといふのに。

一日の授業を終えて、さつそつと帰ろうとしていたといふを檍原に捕まつてしまつた。しかも校門の前といふ、かなり危険な場所で。

「おじ」「ア、離せ」

「ナツ先輩、今日」それは一緒に帰れますね

人の話を聞いたやいない檍原は、それはそれはまぶしい笑顔を向けてくる。

がつちりと私の腕を掴みながら。

ちくしょつ。

もし今日も放課後迎えに来たら嫌だなと思つて、担任の話が終わつたと同時に飛び出してきたつていうのに逆にそれがアダとなつたようだ。

6時間目が体育の授業だつたらしい奴と、下駄箱でばつたりとはち合わせてしまつとは思わなんだ。しかも校門まで追いかけてくるとは。

何が一番腹立つって、あずき色のダサいジャージを着こなしているあたりだ。

こんな今時珍しい芋ジャージが似合つなんて、私ぐらいなのにー。

「着替えてくるんで、ちょっと待つてください」

「じめんこうむる」

「だったら俺のクラスまで一緒に来てください」

「勘弁してください」

「もー！俺にジャージで帰れって言うんですか？」

「手を離せって言つてんだよ！ついでに一緒に帰るといつ選択肢を

捨ててくれと言いたい」

「じゃ、俺のクラス行きましょうか

「待てええ！なにが『じゃ、』だ！」

私の腕を掴みながら強引に教室へ行こうとする奴に対して、足をふんばつて抵抗する。さつきからチラチラ人に見られてるのが気になつてしまふがいい。

これだから嫌なんだ。

まぶしい人間と一緒にいると、校門にいるだけでも田立つてしまう。放課後の校門なのだから、これからあつといつ間にも人も増えるだろう。

こうなつたら奴の氣をそらして、隙を見て逃げよう。

「ナツ先輩、おとなしくついてきてくださいよ」

「やだ

「すぐ着替え終わりますから～」

「やだ

「こう見えても俺着替えめちゃめちゃ早いんすよ

「やだ

「ナツ先輩？」

「やだ

「ちょっと、生返事してるのでしょー！」

あ、奴の気をそらす方法を考えてたせいで生返事してたのバレた。

ぶつつと頬を膨らまして拗ねる榎原。くそ！

イケメンでやつは、なんでもサマにしやがる！

ふくれつたらを味方にできる男なんて小学校低学年までだぞ！

腹立つわ、本当に。

「とつあえず腕離してみよつか」

「やだ」

「一瞬でいいから」

「やだ」

「オイ」

「やだ」

「『やだ』返しすんな…さつきの生返事の」と根にもつてんな、お

前…」

なに「イツ。子供か！

「もー！なんでそんなに一緒に帰りたがるかなあ？」

「だつて、同じとこ行くんだから別々に帰るほうが不自然ですよ」

むしろあんたと私が一緒に歩いてるほうが不自然ですから。

「それにせつかく知り合つたんだからナツ先輩ともつと仲良くなりたいですもん！それにはまず、じつくり話しながら下校するのが一番ですよ」

はい、出ました。

人懐っこさー20%！

うんまあ、悪い奴じゃないってことは分かってる。  
むしろ、こんな地味な私と仲良くなりたいと言つてくれるなんて良い奴だ。

しかし申し訳ないが、まぶしい人種である君とは仲良くなれない。

私の願いは、静かに地味ライフ送りたいということなのだよ。

君と関わったらい、まわりの人的好奇な視線にさらされてしまうのだよ。

例えば「何あいつ。地味女のへせに身の程知らすー。」的な女子の怖い視線とかね！

さらに言えば、なにばことうござ（＆じつことうござ）も仲良くなれない原因だ。

私はイケメンっぷりを見せつけられるといらつとする性質である。どうやら私は世の中の女子とはまったく方向性のちがう女子のようだ。

「分かった、分かったよ。待ってるから。だから離して？腕痛いんだよ」

後半、多少演技してみた。

すると槇原はごめんなさいと言いながら力を緩めた。今だ！

体育でも見せたことのないスタートダッシュを決めてやった。なにやら奴が「あー！」とか言つてる声が聞こえたが、逃げたもん勝ちだ。

後で何か言われるだらうなと思いつつも、とりあえず良しとする。

・・・ちなみにその後。

喫茶店でのバイト中、ずっと文句を言われ続けました。やつぱりうざい。

## 兄、登場（前書き）

今回つっこみまくりの主人公

## 兄、登場

今日はまったく最高の一曰だった。

金曜日は私の大好きな曜日である。

嫌いな体育も数学もないし、毎週楽しみにしているドラマがある。そしてなんといつても喫茶店が平和（檜原がいないから静か）だ。さらにさらに今田は学校で檜原を一度たりとも見かけなかつたので、こそそと逃げ惑う（地味に疲れる）ことをしなくて済んだ！ よつて、私はなんとも最高に機嫌がいいのだ。

小糸に鼻歌を奏でながら、おじいさんと一緒に店を閉めて我が家へと向かう。

さて昨日からじつくり煮込んで寝かせてあるカレーを食べよう。とぞ美味しいのでしょうか。実に楽しみだ。

上機嫌でリビングの扉を開ける。

・・・色々とありえない光景が広がつていた。

「あ、ナツせんぱーー！おかえりなさい」

ありえないその？。

檜原が家の中にいた。

ありえないその？。

めつたに家にいない兄が、檜原とテーブルをはさんで座つている。

そしてありえないその？！

ふたりでカレー食つてる！

え、それ昨日から煮込んで楽しみにしていた、これから私の胃に收

まるはづのカレーだよね！？なに食つてんのーなに勝手に食つてんのー！

「春<sup>はる</sup>・・と、マキくんじやないか。どうしたんだい。めずらしー」

おじいさん。

めずらしーとかいうレベルじやないから口。確かに兄が家にいるのはめずらしーけども。槇原に関しては突つ込むべきでしょう。

「二人は知り合いだつたのかい？」

「いや、初対面」

おい！

なんで初対面の二人が仲良くカレー食つてんだよ！

「なんかコイツ怪しかつたから、これから尋問しようと思つてたと  
こ」

おーい！

尋問つて！しかもそんな奴にまずメシを食わすな！

・・とりあえず、兄は意味わからん人だから無視しよう。

「槇原、あんた怪しい行動つて、なにしてたわけ？」

「えー別に怪しいことなんてしてませんよ。家の前で待ち伏せしてただけです」

「じゅうぶん怪しい」

「失礼な！ナツ先輩にお願いがあつて待つてただけです」

・・お願ひだと？

聞きたくねー。絶対かなえてやりたくねー。

でも、気にはなるから一応聞いてみよう。

「あのですね英語教えてください。月曜にテストがあつて、赤点とつたら1週間補習になつちゃうんです」

「え、やだ」

「即答しないでくださいよー！言つておきますけど、俺が補習になつて困るのはナツ先輩のほうですからね。俺、バイト来れなくなつちやうんですよ」

ちつとも困りませんが。むしろ願つたり叶つたりつて感じですが。てこうかなぜ上から目線なんだコイツは。

「奈津、勉強ぐらじ見てあげたらいいじゃないか

おじいさん。

きっとあなたは売上の事を考えているのでしょうか、私は嫌です。

「・・コイツ、何者？」

急になんだ、兄よ。

いまさら。そして思いつきり話の途中でしじうが。

まあいい。いぢり兄に付き合つてたら口が暮れるので再び無視しよ。

「彼は榎原工くん。喫茶店のバイトをしてくれてる子だよ。それで、こっちが奈津の兄で春。マキ君は奈津と同じ学校だから春の後輩であるね。」

私と違つて、おじいさんはきちんと一人の橋渡しをしてあげた。や  
さしいな、まったく。

「3年生のハルさん！ナツ先輩のお兄さんだったんですか？」はじめ  
まして～」

檍原よ、にこにこ挨拶をしているけども。

君はもう少しこの人に尋問をされるといひがあつたのだよ。

「マキ君、春のこと知つてゐるのかい？」

「めつたに学校来ないけどハルさん有名ですもん。かつこいへつ  
てクラスの女子が騒いでました」

そう、実は我が兄もまぶしい人種なのである。

どちらかというと女っぽい顔立ちで華奢なタイプだが、地味に筋肉  
ついてたり背が高いので立派なイケメンに属している。

基本的に無表情（実はほんやりしているだけ）なところや、黒髪な  
うえに黒づくめの服装を好んで着ているあたりが神秘的に見えるよ  
うで、イケメンぶりに拍車をかけているようだ。

余談だが、そんな兄は何をかくそう不良である。

私としてはこんな意味不明なほんやり男が不良だなんてやつてけね  
ーだろと思うのだが、一応そういう仲間どつるんでいるから不良の  
括りに入れている。ていうか学校めつたに行かないくせに、噂にな  
つてゐるつてどういうことだよ。

もうひとり腹立つ人、身近に発見。

噂のハルさんと私が、兄妹だということをバレないようになけれ  
ば。

「こいつ電柱に隠れてこそこそしてたから、ナツのストーカーだと

思つてた

兄よ。よくストーカーだと思つた奴を家の中へ入れたな。

「あんた、なにも電柱で「ソソソソしなくても・・・」  
「だつてナツ先輩、逃げるじやないですか」

うう。

否定できなー。

「無理やつ家の中に押し入つてやるーと思つて待ち伏せしてました。

」

それはもはやストーカーと言つても間違ひではないと思つ。

おじいさん、田を覚ましてください。

彼はストーカー候補生ですよ。

被害者である私が、何故勉強なんぞ見てやらにやいかんのですか。  
そう訴えようとしたものの、おじいさんは既にいなくなつていた。

「・・兄ちゃん、おじいさんは?」

「風呂」

「くわう、言い逃げか・・。じょうがない、ただし1時間だけだからね。9時から見たいドラマあるんだからー。」

「わーい!ナツ先輩の部屋楽しみー!」

はあ、最後の最後でどんでん返しをくらつてしまつた。  
せつかくいい一日だつたと思つたのになあ・・うえ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5714y/>

---

まぶしい人は嫌いです

2011年11月21日16時31分発行